

「なぜ？」から始まる未来のアフリカ

鎌田裕樹・張宗智

授業で先生が、「今日は面白いものがある」と糸で繋がれた2つの紙コップを取り出した。あれはなんだろうと不思議そうにしている生徒の前で、先生は得意顔で紙コップから紙コップへと声が伝わる場所を見せる。生徒は新しい発見に興奮し、その様子は日本の子供のそれと大きく変わらない。これはケニアのとある学校での理科の授業風景である。

近年経済成長が始まりつつあるとはいえ、以前としてアフリカには文字が読めず、お金を数えることもできない人が多くいる。文字が読めなければ職業に就くための教育もままならないだろうし、数字が扱えなければ経済的に豊かになっていくのは難しいだろう。

アフリカで教養教育を普及させるために、様々な支援が行われていて、その効果は識字率の上昇などに表れている。しかし、根本的に改善していかなければならないことがある。それは、人々のものの考え方だ。

アフリカの文化では、目上の人の言うことは絶対である。学校でも、先生の言うことを生徒がそのまま覚えるという教え方が一般的で、生徒の論理的な思考を育てる教育は行われていない傾向にある。論理的な思考は社会を作っていくのに不可欠なものである。では、どのようにしたらそういった力を伸ばしていけるのだろうか。

『「なぜ？」』というのを先生と生徒が体験し、それを『おもしろい!』と思うことから始まるんです」

そう話すのは、独立行政法人 JICA で国際的な教育支援に携わっている又地淳さんだ。又地さんはアフリカにおける理数科教育プロジェクトを担当している。

理数科教育プロジェクトは、アフリカで初等教育が浸透しつつある地域において理数科教育を根付かせる取り組みだ。このプロジェクトでは、「なぜ? どうなっているの?」という疑問とそれを解決していくという流れを重視しているが、最大のネックは先生である。

先生は大学まで出ていたとしても知識を詰め込んだだけであり、理科や算数の授業で習うことが日常生活でどのように役立つかを認識している人は多くない。また、学問としてのみ勉強してきたため、理科は難しいものであり生徒には敷居が高いと考える傾向がある。そこで、JICA の理数科教育では、まず先生のみで実験を行う。学問と日常が繋がっていることを先生に実感してもらうのだ。そして、生徒と一緒に実験をすることによって、その面白さを伝えるのだ。

冒頭で紹介した糸電話の実験で、先生は糸を通して音が伝わることにとても驚いたという。また音が伝わる時には少しばかり糸が揺れていることや、糸を掴むと振動が伝わらず音が途絶えてしまうことを目の当たりにし、音は振動であるという既存の知識と日常が結びついた。そのおかげで授業の時間では、先生自らが一番楽しそうに実験を行い、生徒たちも見慣れない現象に夢中になったという。

理数科教育により、アフリカの子供たちのものの考え方は変わりつつある。この子供たちが未来のアフリカを発展させていく原動力となるのだ。

【編集後記】

おそらく多くの方はアフリカに興味がないでしょう。しかし、2013年に11億人だったアフリカの人口は年々増え続けており、2050年には25億人に達すると予想されています。この数は世界の総人口の4分の1に相当し、21世紀はアフリカの世紀と呼ばれています。一方的なお金の支援は急速に過去のやり方となりつつあり、これからはニーズに沿った支援をする必要があります。その点では今回取材したJICAのプロジェクトはまさに住民参加型のものであり、その国のニーズに合ったものであると思います。

張宗智

このテーマを選んだとき、私自身はアフリカにそれほど興味がなかった。しかし、調べを進めるにつれ、このテーマの深さに気づかされた。アフリカは教育だけでなく様々な視点からみても面白い場所であると思う。

鎌田裕樹